今、伝えたい私の思い

～新型コロナウイルス感染症が拡大する社会から見えてきたこと～

障がいのある人の視点から、全ての人が共に生きる社会をめざす

杉田宏さん(ピアサポートみえ理事長)

新型コロナウイルス感染症によって、これまで私たちがめざしてきた「地域の中で共に生きる」という理念が揺るがされていると感じています。

「健常者と同じように治療や検査が受けられるのか」「最新の情報がきちんと得られるのか」など、医療や情報の面から「命の格差」が生まれかねない状況が懸念されます。そして、もしこの事業所で発生した場合、風評被害や介助者不足が起こり、事業を継続していけなくなる恐れがあります。それは「地域で生きていく権利」の危機でもあります。

緊急事態宣言が解除になるまでは、スタジオピア(日中一時支援)については午前と午後に分けて行ってきました。今後も「密をさける」「消毒の徹底」など、できることはやっていきますが、食事・風呂などの支援では、どうしても人との接触があります。その際、多くの利用者さんは「自分がもし感染していたら、うつしてしまわないか」と気に掛けています。あるお母さんは「人に迷惑は掛けられないから、コロナが収まるまで、私が家でこの子をみます」と言われています。ほかにも、出掛けた先で、私は今まで「これカゴに入れてください」「くつひもを結んでもらえますか」など、気軽に頼んでいましたが、気が引けるようになりました。

私たちは外に出ていくことで刺激を受け、さまざまな人と関わることで、この地域で共に生きていることを実感します。今後はコロナウイルスも収束していくとは思いますが、出掛けた時に「何で障がいがあるのに外出しているの、人の手も借りなきゃいけないのに」というような見方をされないか、不安があります。

私たちが社会の中で、当たり前のように生活するためには、人との関わりが不可欠です。しかし、今は感染予防のため人との距離を保つことも必要です。そんな今だからこそ、障がいのある人もそうでない人も「共に生きる」とはどういうことなのかを問い返しながら、発信していきたいと思います。

男女共同参画社会の推進に取り組む

長谷川峰子さん(三重県男女共同参画センターフレンテみえ事業課長)

これまで当たり前と感じていた日常生活に、直接大きな影響を及ぼすようなことが起きた時、社会的に弱い立場に置かれている人たちがさらに深刻な影響を受けてしまう社会に私たちはいる。このことを今、強く感じます。

ここ数カ月の間にフレンテみえへ寄せられた相談の内容は、新型コロナウイルスの感染拡大からくる生活や将来に対する不安に関わるものが多くなっています。

さらに、最近はＤＶ(ドメスティックバイオレンス)※を受けているという相談も目立つようになってきました。家庭で過ごす時間が長くなるにつれ、ＤＶが起こりやすくなっている状況があると思います。しかし、相談される人の多くが「私が悪いから…」「我慢するしかない」と自分を責め、悩んでいます。

困難な状況に置かれている人たちが、安心して暮らしていくことができる仕組みや制度を整えていくことは大切です。その一方で、今何が必要なのかを考えた時、本当の意味で「心を砕く」ということが、私は必要だと思います。

「女性の解放」を表す
フレンテみえ前のモニュメント

周りの人に「どうしたの」「私にできることはあるかな」「何かあったら言ってね」といった声を掛けることは「私はあなたのそばにいるよ」というメッセージを伝えることになるのではないでしょうか。そうすることは、周りの人にとって、安心できるつながりを感じることや今置かれている状況から一歩踏み出そうとする力になると思うのです。

これは、当たり前のことなのかもしれません。しかし、自分のことで精一杯になってしまいがちな状況だからこそ、改めて私は、家族や友人に、そして自分の周りの人たちに「心を砕く」ことを大切にしていきたいと思います。

※ＤＶ(ドメスティックバイオレンス)…家族や恋人など、親密な関係にある人からの暴力